

# 1980年代中国の「アート・ワールド」における前衛美術の包摂と排除

——「現代芸術大展覧会」をめぐるキュレーターの言説実践に着目して——

東京大学大学院学際情報学府博士課程 陳海茵

## 1. 目的

1989年2月、中国の改革開放により西洋から輸入された現代アートや現代思想に影響を受けた前衛芸術家の諸派は、初めて中国で国家規模の公式展覧会を開くことを許可された。しかし、展覧会は途中から過激な銃撃パフォーマンスなどの出現によって一時中止に追い込まれる。

このセンセーショナルな事件は、国内外で大きく報道され「天安門事件の前哨」とも語られてきた。しかし、「大展覧会」という催しの全体を鑑みた時、1980年代中国の文化インフラ再建という文脈において国家級の美術館がそれまでアンダーグラウンド（非公式）で活動していた前衛芸術家に接近していく動きが、どういう意味を持つのか。また美術館でさまざまなパフォーマンスを実行した若手芸術家たちはどういうやり方で政府の専制的な「アート・ワールド」を利用していたのか。

本論考は、芸術社会学と歴史社会学の立場から、国家が現代アートを「公認＝総括」する——ある種の線引きをする——実践と、キュレーターや芸術家といったアート・ワールドの参加者がそれを乗り越える活動との緊張関係を紐解くことを目的とする。

## 2. 方法と結果

芸術社会学者 Paul DiMaggio (1991) は、生産者の活動だけでなくそれを取り巻く資源、消費者、規制機関、および競合他者といった「機会空間 (opportunity space)」や「組織的領域 (organizational field)」に関する議論の重要性を指摘した。また、Ferguson (1998) や Baumann (2001) は、アート・ワールドにおける批評テキストや知識の生産が特定のジャンルの文化を正当化・卓越化させていく過程を分析した。

本研究では、美術館を管轄する党中央の文化部と、アンダーグラウンドを中心に活動してきた前衛芸術家の活動に加え、「大展覧会」の実行を任された2名の最高責任者（キュレーター）の言説を分析対象とする。

分析の焦点となるのは、「大展覧会」を「80年代の総括」として捉える政府の方針—およびその方針のもとで行われる作品の選別と排斥—に対する前衛芸術家の反発とそれを擁護するキュレーターの論理である。一例としてここでは、キュレーターを務めたうちの1人である栗憲庭による、(1)中国における展覧会の役割、(2)芸術の社会性への言及（当時のテキスト資料）を精査することで、国家のプロジェクトと前衛美術の折り合いの悪さを説明することで前衛美術を擁護しようとするキュレーターの実践が明らかにされる。また、「総括＝回顧には適さない」現代アートというジャンルの独特さをことさら強調することで、国家主導の文化再建事業に組み込まれないよう抗うことが目指されていたことがわかった。

## 3. 文献

Baumann Shyon, 2001, "Intellectualization and Art World Development: Film in the United States", *American Sociological Review*, Vol. 66, No. 3. (Jun., 2001), pp. 404-426.

DiMaggio, Paul, 1991, "Constructing an organizational field as a professional project: US art museums", 1920-1940, *The new institutionalism in organizational analysis*, (67)

Priscilla Parkhurst Ferguson, 1998, "A Cultural Field in the Making: Gastronomy in 19th-Century France", *The American Journal of Sociology*, Vol. 104, No. 3. (Nov., 1998), pp. 597-641.